

「自らの命を自らの力で守り抜くことのできる児童の育成」

平成 26 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 安田町立安田小学校

I 学校における背景、問題意識

本校は、海岸部から直線で約 300mの地点に位置し、地域の避難所として指定されている体育館の海拔が 10.5mである。現在の想定では、運動場の一部が津波による浸水があるものとされているが、校舎は、耐震補強工事により倒壊は免れる可能性があるものの、巨大地震発生に伴う強い揺れや地震発生に起因する津波の襲来などにより大きな被害が生じるとされている。

校区は、学校の統廃合の関係で町内全域に広がり、海岸部・平坦部・山間部と様々な地理的、地形的環境から児童は登校してきており、地震発生時に自らの命を守るためにいかなる行動をとらなければならないか、その生き抜く力を学び取らせることは極めて重要であると考えます。

II 取組のポイント

安田川流域に開けた町内各地（土佐湾に面した海岸部〈不動・町地区・唐浜〉平坦部〈西島・東島〉山間部〈中山〉と多様な地理的、地形的環境）から、児童は本校に通学してくる。近年の少子高齢化の波をもろに受け、児童数は激減状態にあるものの多様な地域特性をもつところから少数の児童が通ってくる実態には変わりがない。そこで、児童が様々な自然災害をはじめとした生命の危険にさらされた時、適切な判断とともに自分で自分の命を守る行動がとれる力を各発達段階に即して指導し、個々にその力をつけさせることが重要である。

そこで、地域実態や児童実態に即したより実践的な防災学習の積み重ねを通して、「自らの命を自らの力で守り抜くことのできる児童の育成」をねらいとした防災教育に取り組み、その成果の普及に努めたいと考えた。

III 取組の概要

1 安田小学校の防災教育の目標

- 災害に関する正しい知識を身に付ける。
- 非常時に自らの命を守るために、日頃から安全を意識して生活できるようにする。
- 仲間や地域のために進んで行動し、共に助け合う精神と態度を養う。

2 防災教育における目指す児童像

- ◇危険を予知しながら、状況に応じて、冷静な判断ができ、自分の命を守るために主体的に行動できる児童
- ◇地域と積極的に関わり、地域の人々と協力しながら、献身的な態度で何事にも取り組める児童
- ◇自然災害の種類や発生のメカニズムを知り、それに備えた学校及び地域の取組を理解し主体的に関わることのできる児童

3 取組内容

(1) 地域との連携

①防災頭巾贈呈式（5月29日）

～地域の人々の防災頭巾にこめられた思い～

本校では J A 土佐あき安田支所で高齢者ボランティア活動をしている「助け合



いの会」から、毎年新1年生に「防災頭巾」をいただいている。5月29日には、会長の清岡さんに来校していただき、防災頭巾への思いを全校児童に語っていただいた。

阪神・淡路大震災が起きて数年が過ぎた頃、地域でも防災について学習する機会が広がり始めた。よさこい祭りの衣装の余り布のリサイクルについて考えていたところ、この余り布を使って防災頭巾を作り、安田小学校全児童に贈呈し、訓練や地震の時に使ってもらおうというこ

とになった。高齢者の方々と共に 150 枚の防災頭巾を 2 ヶ月半かけて作製した。平成 21 年 9 月 3 日の贈呈式で、J A 土佐あき組合長、助け合いの会役員、高齢者代表者から全校児童に防災頭巾を贈呈した。その後、卒業生がその頭巾を家に持ち帰っているということを知り、新 1 年生のために防災頭巾をプレゼントすることにした。

真新しい防災頭巾には、地域の方々の災害から児童を守ろうという強い願いが感じられる。その願いを感じながら、大切にに使わせていただいている。

②非常食作り体験（7月18日）

〈目的〉

- ・南海トラフ地震襲来に備え、被災後に生きていく上で何よりも必要な非常食作りを通して、食に対し主体的に取り組むことのできる児童を育てる。
- ・外部指導者（日赤奉仕団安田支部）の方々の指導を受ける中で、児童相互が協力して取り組むことの大切さを学ぶ。

〈参加者〉

5 年生児童 17 名

教職員約 17 名

日赤奉仕団安田支部の皆さん

〈日程〉

- ・安田小学校発 11:00
- ・キャンプ場到着 11:30
- ・顔合わせ（あいさつ）
児童代表が協力者に対して行う。
- ・取組内容の全体説明（日赤奉仕団の代表の方）
- ・ハイゼックスを利用した非常食作り（食べきれない分は、家庭に持って帰る）
- ・おにぎり作り（使い捨てのポリエチレン手袋を使用）
- ・みそ汁作り
- ・食事（班単位で準備ができ次第食べる）
※基本、作業は 5 年生児童に取り組ませ、教員はアドバイスをする。
- ・片付け（食事の終わった班から順次片付けをはじめる）

- ・分かち合い（進行は 5 年担任）
- ・児童の感想発表
- ・日赤奉仕団からの講評
- ・児童代表お礼の言葉



◎非常時においても、衛生面に配慮して食事の準備や食べ方等を学ぶ貴重な機会となった。何よりも、地域の方々に積極的に協力していただき、5 年生児童にとっては、有意義な時間を過ごすことができた。

③地域の夜間避難訓練へ参加

（7月23日）

〈目的〉

- ・学校で実施する避難訓練ではなく、地域の自治会が取り組む「夜間の避難訓練」への参加を通して、夜間避難訓練の重要性を再認識する。
- ・地域での避難場所を再確認するとともに、地域行事への積極的な参加を促す。

〈参加者〉

安田町役場を中心とした地域に在住する児童並びに保護者に参加を呼びかけ、地域住民・本校教職員を含め約 100 名の参加があった。

◎この訓練では夜間における実際の避難行動とともに、避難後には安田町役場の防災担当職員による学習会も実施された。低学年から高学年児童までの参加とともに地域の高齢者も多数参加しており、強い揺れを感じたら高い場所に逃げることの大切さを学ぶことができた。



(2) 避難訓練等

①起震車体験（5月20日）

地震の揺れを体験することにより、揺れに対してどのように対応していけばよいか学習し、災害時に迅速で的確な行動がとれるようにすることをねらいとして取り組んだ。

②集中避難訓練（11月5日～12日）

- ・清掃中（11月5日）
- ・下校中（11月10日）

児童を4グループに分け、通学路を通りながら、避難場所をそれぞれ確認した。また途中途中で避難訓練も行い、危険箇所の確認ができた。



避難場所を地図で確認



ダンゴムシのポーズ

- ・昼休み（11月11日）
- ・放課後（11月12日）
- ・スクールバス乗降時（11月13日）

(3) 防災参観日への取組（11月16日）

「未来に備える防災学習の日」

〈目的〉

- ・防災学習について、様々な立場の講師を招いて学習することによって防災意識の向上を図る。
- ・保護者や地域の方々と一緒に行動することで、交流を深め地域での防災活動を円滑にしていく。

〈日程〉

- ・8:15～9:00 1校時 防災授業参観
- ・9:05～9:35
避難経路に障害物を置いた全校避難訓練（保護者も参加）
- ・9:45～10:15 開会式
講演会「自衛隊員3.11の救援のお話」
- ・10:20～12:00
運動場や体育館でのブースを全校縦割り班で順次回って体験をしていく。
（ロープワーク・煙体験・家具の転倒防止に関する防災セミナー・怪我の応急手当等）
- ・12:30～13:30
昼食（安田町文化センターにて）
- ・非常食の試食（アレルギー対応あり）
- ・お湯を注いで調理（炊き込みご飯、ピラフ、ドライカレー等）

◎この取組も、数多くの団体や地域・保護者の方々の参加協力を得る中で実施でき、防災に対する意識を高めた。

(4) 校内安全点検（7月23日・28日）

〈目的〉

- ・日中多くの児童・教職員が一つの空間で過ごすことの多い学校内で、日常より危険物や危険箇所の点検・把握、改善を図る。
- ・教職員個々が校内外における危険箇所や危険物の把握を通して、危険物の撤去や危険回避の知識・技能の取得を目指す。

〈日程〉

夏期休業中の7月23日に点検作業を主に行い、28日を一斉作業日に設定し、全教職員で危険箇所の改善や修繕に取り組んだ。両日で終了しない作業については各担当者が個別に実施した。



【落下の可能性のある廊下の表彰状の額を撤去】



【倒れてくる可能性のある物を別の場所に移動】

◎日常生活空間において危険物や危険箇所の存在は、各個人の意識の持ち方により大きく左右される面がある。教職員が同一の作業日を設け点検や改善作業に取り組むことで、新たな防災の視点で生活空間を見直すことができた。

(5) 校内研修

①校区内の避難路・避難場所確認

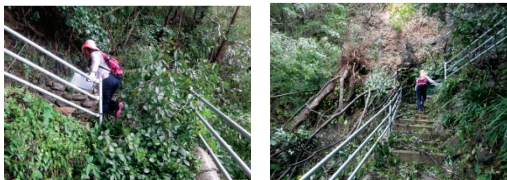
(8月12日)

〈目的〉

- ・児童が自宅に居る時に、どんな経路でどんな避難場所に逃げることができるのか実際に確認する。
- ・教職員が校区内に直接出向き、地域実態を把握することで、今後の指導の糧を得る。

〈日程〉 8:30～15:00

◎安田町にも大きな被害の爪痕を残した台風11号の通過後にフィールドワークを実施した。地元に住する教職員の割合が少ない本校にとって、教職員が現地の避難路や避難場所の現地調査に出向くことは極めて重要である。特に不動地区に新設されたばかりの避難路の破損や倒木等による使用不能の状態も現地で実況検分することができた。



②クロスロード研修 (9月22日)

学校安全対策課から講師を迎え、校内研修を行った。クロスロードはわかれ道という意味であるが、災害対応の様々な場面では、誰もが判断に苦しむ厳しいわかれ道に立つ。その際、その場で瞬時に、しかも誠実に考え、対応することが求められる。

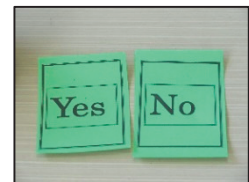
阪神・淡路大震災の経験を元に作られているこの「クロスロード」という学習は、震災の際、遭遇するであろう様々な課題を擬似的に体験できる。災害対応において正解はないと言われるが、クロスロードを通じ、判断力を鍛えたり日ごろの備えの重要性を認識したりすることが必要である。

〈研修における教職員の感想〉

- ・思いがけない意見を前に、考えの甘さに気付かされた。
- ・考えの盲点に気付かされた。
- ・仲間がいることがありがたい、共に考えてよりよい意見を出すことは大切だ。

上記のような感想や意見を持つことができ、充実した研修となった。

この研修を受けて、10月24日には6年生担任がクロスロードを活用した研究授業を行った。



③避難場所フィールドワーク・マップ作り (10月20日・31日)

高知大学 岡村眞 特任教授・高知大学 学部生・5年生・教職員参加



【岡村特任教授と一緒にフィールドワーク】

④授業実践

○3年授業実践 (学級活動)

〈題材〉 「どこにいても地震から身を守ろう!!」

〈題材観〉

本校の防災教育の中学年重点目標の1つである「地震発生時には、教師や大人の指示に従うとともに、状況に応じて自らも適切に行動できるようにする。」に沿い、児童に地震による落下物や倒壊物に対しての危機意識を高めながら、早く安全に避難する必要があることに気付かせる。地震発生時の映像を活用し、災害時には児童自身の意識と判断で主体的に避難できる力を養う。



行動できるようにする。

- ・地震発生後には、地域と積極的にかかわり、周囲の人々と協力しながら、献身的な態度で何事にも取り組めるようにする。

上記の重点目標に沿い、「クロスロード」を活用して、防災対応力の難しさや日頃の備えの大切さなどを学ぶ授業とした。

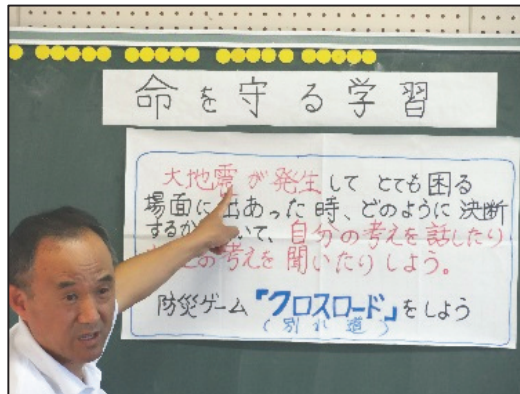
災害に対してその時に少しでも正しい判断ができるよう、また、仲間の意見を傾聴し自分の判断を確かなものに行えるよう、授業者はクロスロードの手順、ポイントを簡潔に分かりやすく示すことができた。児童は、とっさの場合の判断が難しく、回答を決めかねる場面があったが、ずいぶん悩みながらも楽しく学習することができ、その学びを家族防災会議に結び付けることができた。参加教員全員がクロスロードの有効性を確信することができた。

○5年授業実践（総合的な学習の時間）

〈単元〉 「安田町防災メッセンジャー」

〈指導観〉

本単元の学習は、①地震について ②津波について ③山津波についての3本の柱で学習してきた。本時では今まで学習してきたことから、地震から身を守るために「必要なことは何なのか」を考えさせ、「防災マップによる発信」を最終目的とした。そのために、児童から学びの表現ツールとして地図やマップというキーワードがでるよう、安田町役場から出されている防災マップ等を調べ、地震や津波に対する意識を高め、授業展開がなされた。



(6) 防災アンケート結果から

実践的防災教育への取組を通しての防災意識の変容を把握し、取組の検証をすることを目的に、5月と11月に児童並びに保護者を対象にして防災アンケートを実施した。5月、11月とも回収率は100%となっている。

設問によっては、肯定的に変化していないものが見られるものの、「地震が発生した時の安全な避難場所」を問う設問では、学校での地震発生の場合、どこに逃げるかを全児童が理解している結果とな

○6年授業実践（学級活動）

〈題材〉 「家族防災会議に向けて」

〈題材観〉

防災教育 高学年重点目標

- ・地震発生時には、危険を予知しながら、状況に応じて冷静に判断し、

っている。また「家に居る時の避難場所を知っていますか」という設問においても、「知っている」と答えた児童が78%から92%へと向上している。

2回実施した保護者アンケートにおいては、学校での防災教育が必要であると全家庭が認識していた。

調査結果を見る限り、本年度の取組内容に一定の成果があったものと思われる。

IV 成果と今後の取組

1 成果

- 土佐湾に面し、かつ安田川河口流域に開けた場所に町の中心部がある本町は、南海トラフ地震や地震発生に伴う津波による被害に対して避けることのできない場所に位置している。この厳しい現実を目の前にした時、将来の安田町を担う本校児童が小学校段階において、様々な危機に対して自らの命を自らの判断で守ることができるようになることを目的とした取組を実施できたことは大きな成果と捉えることができる。
- 「高知県安全教育プログラム」「防災教育副読本『南海トラフ地震に備えて 命を守る防災BOOK』」等を指導資料として、積極的に活用を図り、学校としての防災教育の更なる充実を図ることができた。
- 防災の視点を持って、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、学校行事等多岐にわたって本校の教育活動全体を通して防災教育を行うことができた。
- 地域を巻き込んだ防災参観日を設定し、本校の取組内容を保護者だけでなく広く地域全体に知らせることができた。この取組は、町内の各種団体等の参加協力を得て地域の防災意識を高める役割を果たしたものと考えられる。
- 広範囲から通勤してくる教職員にとって、勤務地校区の地形や実態、避難場所の把握は、意識的に関心を持たない限り、難しい現実がある。しかし、今回の取組を通して、町内の避難路や避難場所の実地検分と児童を引率しての避難場所や避難

路の確認作業を積み重ねる中で、地域理解を一層深めることができた。この取組は、児童も同様と捉えることができる。

- 年度当初より、本校におけるあらゆる教育活動を通して、防災の視点をもって施設設備の安全点検並びに改善や改修まで全教職員が参加し、取り組むことができた。

2 課題と今後に向けて

防災教育に対する取組に、基本的にゴールはあり得ないものだと考えなくてはならない。この土台となる考え方をどれだけ教職員、保護者、地域で共有し、広めることができるか。このことが、減災に向けての大きな原動力になるものだと考えられる。

そのために必要なことは、小学校段階より意図的系統的な防災学習の取組の継続が何よりも重要と考えられる。「喉元過ぎれば、熱さ忘れる。」でなく、常にあらゆる災害に対して、自らの安全行動と支援者となりうることでできる人材を育てる手立てを考え、実践を行っていかなくてはならない。この姿勢をいかにして持ち続けるかを今後とも追求していきたい。

- 防災の視点をもつての教育活動の展開には、ゴールや出口はないものと考えていかなくてはならない。日々の教育活動の中でいかにしてより質の高い取組へと発展させていくか、常に意識した教育活動を構築していく必要がある。
- 平成26年度の取組を通して、児童の防災意識や命を守るために取らなければならない行動の在り方は、様々な教育活動を通して、一定の定着は図られている。しかし、更なる防災意識の向上を継続して取り組んでいく必要がある。
- 町内に残る唯一の小学校として、防災教育に限らず様々な分野での地域との連携や地域の人材の活用、関係各機関との連携や交流は切り離せないものがある。何よりも、命を守る取組である防災教育こそ、より地域と一体化した取組でなければならない。その意味からも更なる関係各機関と連携した取組の発展を目指していくことが求められている。